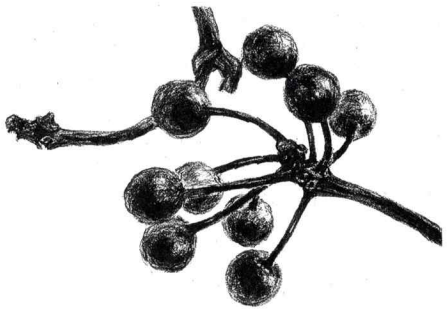
朝日歌壇 俳壇



〈サンキライⅣ〉　日高理恵子

小林貴子選

冬紅葉まだ恋なんて言ってるの　（羽村市）鈴木さゆり

シャンソンのやうに散るなり夕紅葉　（川越市）吉川　清子

☆「俳句とは何か」を脇に冬籠　（青梅市）市川　蘆舟

十一月潰されてゆくガザの街　（取手市）御厨　安幸

☆分からないことが楽しい秋深し　（成田市）かとうゆみ

ハイキング昼は滑子の御御御付　（本庄市）篠原　伸允

ゐのししの出るやも知れぬ魚屋道　（芦屋市）豊田　征子

きゆつと鳴く泥に手応へ泥鰌掘る　（神戸市）小柴　智子

生き残るための長航鳥渡る　（東京都）石川　昇

口利かぬ妻へみかんを転がしぬ　（前橋市）田村　とむ

【評】一句目、言われている人は何歳でも。心のときめきを大切にしよう。二句目のように散れば葉っぱ自身も気分良さそう。三句目、冬籠の三カ月、皆でこれを考えよう。四句目、地名のガザはガーゼの語源とも言われる。平和よ戻ってくれ。

長谷川櫂選

秋風に羽ある種となりにけり　（東京都）佐藤　正夫

枯るるもの青空にあり山の寺　（川崎市）小関　新

☆肉になる牛磨かれて冬日和　（洲本市）高田　菲路

器量なら山一番のこの木の実　（大阪市）上西左大信

おでん酒つぶしのきかぬ汝と吾　（野田市）松本　侑一

流氷の響き底なし木賃宿　（三重県明和町）西出　泥舟

皮裂けて嚙みつきさうな石榴かな　（大村市）小谷　一夫

エジプト王妃いつも横向き冬に入る　（福岡市）釋　蜩硯

冬眠の兜太先生すこやかに　（京都市）室　達朗

☆「俳句とは何か」を脇に冬籠　（青梅市）市川　蘆舟

【評】一席。遠くへ飛ぶための羽や粲。牧野記念庭園にて。二席。空の中で枯れてゆくもの。澄みきった冬空。三席。人間はほかの生物の命を奪わなくては生きられない。これも愛情。十句目。問いつづけることが大事。答えはない。

大串章選

蔦もみじ童女の墓を抱きしめる　（沼津市）石川　義倫

孫十人まだまだ続く七五三　（向日市）秋葉真紀子

星月夜童話忘れず誰も老ゆ　（横浜市）飯島　幹也

父祖の地に卒寿を生きる村祭　（村上市）佐藤　直子

満月や星はまたたき忘れをり　（藤岡市）飯塚　柚花

祈ること人はいつ知る七五三　（東京都）中村　孝哲

三歳の童女をわきにおでん酒　（筑西市）加田　怜

またひとつ水輪の中へ木の実落つ　（大阪市）上西左大信

七五三異国に暮らす孫三人　（東京都）三井　正夫

廃業の宿山茶花の白極む　（多摩市）田中　久幸

【評】第1句。「童女の墓」を抱きしめているのは作者自身。感情移入の句。第2句。七五三の参拝には祖父母も付き添って行く。「孫十人」は大変だが嬉しい。第3句。年取っても子供のころ聞いた童話は忘れない。「星月夜」が明るくて佳い。

高山れおな選

和便器をにらむ少女の冬ざるる　（川崎市）小関　新

レノン忌や義母はヨーコにうりふたつ　（つくば市）小林　浦波

月からは見えぬ国境開戦日　（富士市）村松　敦視

☆肉になる牛磨かれて冬日和　（洲本市）高田　菲路

寒天小屋に吊る三尺の温度計　（大阪市）今井　文雄

☆分からないことが楽しい秋深し　（成田市）かとうゆみ

教え児とダブるガザの子街冴ゆる　（鈴鹿市）萩森　繁樹

空つぽになつても続く日向ぼこ　（横浜市）菅沼　葉二

妻の名を忘れし夫と秋日和　（福島市）菅野美佐子

天高しベンツの五人皆傘寿　（武蔵野市）河野恵美子

【評】小関さん。当方の年代だと汲取り便所に入れない子はいたが。事実その通りだったのだろう「にらむ」が面白い。小林さん。何やら微妙なご縁。村松さん。季語開戦日は対米英開戦の日をさすが、句の内容は普遍的な批判になっていよう。

うたをよむ　紙のよろこび

小野田　光

十月初めに刊行された睦月都の第一歌集『Dance with the invisibles』は、どこまでも美しさが行き届いた本だ。

空白の季節いくつか費やして灯れる冬のマルセイユ靴店
わたしの彼女になってくれる？　穂すすきのゆれてささめく風の分譲地　睦月都

この歌集に収められた三三二首のうちどの歌を引いても美しさは伝わる。加えて睦月の歌の美賓を見事に表した造本が読者をより深い読書体験へと導く。見返し紙のデザインにまで凝った作りで、バレリーナと花の画をあしらった表紙カバーと帯の紙質は心地よい手触りを生み出す。その感触が歌の数々と響き合っているようだ。紙の本でこその美を持ち合わせた一冊によろこびが絶えない。

北山あさひの第二歌集『ヒューマン・ライツ』は、北山の地元北海道の一部書店で十月下旬に先行発売された。東京などの都市部より紙の刊行物の流通が数日遅れることもある地域での異例の試みは、デジタル配信にはない紙の本特有の制約を逆手にとって発信された地方発のメッセージだ。

この日々を忘れないでね巨大なるカムイの顔がビルのぞきこむ　北山あさひ
人びとが「北の風土」と呼ぶものをただ生きて死ぬふつうのことに

北海道生まれの歌の数々を北海道の人たちがいち早く受け取れるのも、その地方の住人のよろこびであり、一種の「人権」であるとは言い過ぎだろうか。

DX（デジタル化）時代にあって、文学を読む行為に紙の書籍が与えてくれるよろこびを改めて感じた秋だった。（歌人）

風信

「林翔全句集」　橋本榮治・筑紫磐井・鈴木比佐雄編。林は俳誌「馬酔木」「沖」で活躍し、俳人協会賞や詩歌文学館賞を受賞した。2009年に95歳で死去。「一花だに散らざる今の時止まれ」（コールサック社・5500円）

第38回俳壇賞　さいたま市の島貫恵さん（63）の「遠くまで」（30句）に決まった。本阿弥書店の「俳壇」誌の新人賞にあたる。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。